ウルリム
響
# 울림

聖公会生野センター機関誌

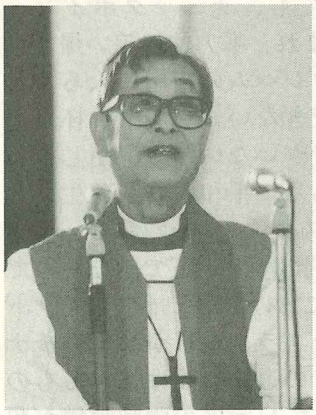
第26号
2003年2月10日発行

題字：康秀峰

E-mail:ikuno@nskk.org　URL http://www.nskk.org/province/ikuno

## 聖公会生野センター10年に思う
## ＝外国人と共に在る社会のために＝

高野 晃一



1952年4月28日。対日平和条約が調印され発効されましたが、実はたいへんな決定が同時になされました。それも法務省（法務府）民事局長の一片の通達によってです。「1.朝鮮人および台湾人は、内地在住者も含めて全て日本の国籍を喪失する。2.朝鮮人および台湾人が日本の国籍を取得するには、一般外国人と同様に帰化の手続きによること」。こうして旧植民地出身者は一斉に日本国籍を失い外国人扱いとなった結果、出入国管理令や外国人登録法が適用されるようになりました。しかし、この時の外国人登録者数は約60万人で「在留資格及び在留期間が決定されるまでの間、引き続き在留資格を有することなく、本邦に在留することができる」との暫定措置が取られました。しかし、これは単なる資格であって権利ではありません。

ここから、戦後の様々な問題が生じました。例えば、在日韓国朝鮮人の人々は国籍がないことを理由に、戦後補償が受けられない。「外国人登録証明書」を常時携帯しなければならない。民族学校が正当に認められないので、充分な公的補助を受けられない。民族名を用いることで、就職差別が度々生じている。国民年金や介護保険などにも、厳しい制約や条件がつけられている、等々です。

在日外国人の人々が安心して住むには様々な配慮が必要でしょうが、最も基本的には法律が定める在住できる人権の保障です。このため「外登法問題と取り組む全国キリスト教協議会」と、私が議長を務める「外登法問題と取り組む関西キリスト教代表者会議」では、長い準備期間を経て3年前「外国人住民基本法（案）」を起草しました。それが法律として認められるまでには今後も長い年月が必要でしょうが、現在全国的な運動を展開しております。既に大阪・越中公園に教派を超えて数千人が集まる「国際協力の日」も3回を重ね、今年も10月末日に予定しています。

今日まで「聖公会生野センター」の10年を支え、また今後の運動のため後援くださる全国・教区の方々に改めて深く感謝申し上げます。また同時に、こうした運動も展開されていることも覚えて、ご理解とご支援をお願い申し上げるものです。

（たかの・こういち　日本聖公会大阪教区主教
聖公会生野センター後援会会長）

もくじ

1　聖公会生野センター10年に思う …… 高野 晃一
2　時のしるし　『ああベツレヘムよ・・・』 …… 西原 廉太
3　多民族・多文化共生のすすめ⑤　外国人学校の制度差別をなくそう …… 金 光 敏
4　韓国市民の眼⑤　広場に波打つ希望 …… 姜 恵 楨
5　こんな本あります　本から「在日コリアン」を考える⑫ …… 高 二 三
6　「日朝」「在日」、そして私たち …… 佐藤 信行
7　ザイニチの分裂から …… 丁 章
8　ゆっくり描きながら …… 山根 博子
9　ほんものの「芸」は、やっぱり心にジンジン響く …… 牧口 一二
10　お知らせ／余韻

# 『ああベツレヘムよ・・・』

西原廉太

2003年を迎えた。アメリカによるイラク攻撃の可能性が高まる中、今年が平和な年であるようにと、心から願う。しかしながら、現実には、今もこの瞬間も、誰かの尊い命が、不当なる国家と軍の論理の中、奪われている。昨年末のクリスマスにパレスチナから送られてきたメッセージの数々には胸が痛んだ。中でも、ベツレヘム聖書大学のビシャーラ・アワド学長からのクリスマス・カードに綴られた言葉は重い。

世界中のクリスマスで必ず歌われる聖歌がある。それは、『ああベツレヘムよ』。日本聖公会の聖歌集では第23番。英語の原詩タイトルは、"O Little Town of Bethlehem"。恐らく知らない人はいないであろう。「星のみにおいて、深く眠る…」。英語では、"O deep and dreamless sleep"、「深く、夢見ることもなく眠る」となる。今日のベツレヘムの現実には、ヘロデ王が子どもたちの虐殺を命じたイエスの誕生の時以上のものがある、とアワド学長は言う。「みなさんがクリスマスに思いを馳せる時、どうか少しでも、みなさんの祈りの内に『ああベツレヘムよ』を思い出して欲しいのです。今、ベツレヘムは深く悲しんでいます。11月22日以来続いている厳しい外出禁止令の下、すべてのパレスチナ人は苦しみもがいているのです。」私たちは、新聞などでも「外出禁止令」（curfew）という言葉を耳にしているが、未成年者が夜間の外出を禁止されるといったものとは根本的に異なる。むしろ、「監禁」と呼ぶのが相応しい。

アワド学長は続ける。「みなさんは外出禁止令というものがどういうものか、想像し難いかも知れません。それは残酷なものです。いかなる理由があっても誰も自分の家を離れることが許されません。すべての店も、学校も閉じられます。職場も開けません。クリスマスの買い物もないし、何の飾りつけもありません。誰も教会へ行くことができないのです。みなさんがこの美しい聖歌を歌う時、どうか<今の>ベツレヘムの暗さを思っていただきたいのです。そして、外出禁止令がすぐにも解除され、ベツレヘムの包囲が終わるように、祈っていただきたいのです。」外出禁止令は突然始まる。乱入してきたイスラエル軍の装甲車の拡声器と銃声によって横暴に告げられるのである。救急車も消防車も出動できない。食料や医薬品の搬送も不可能となり、子どもたちは遊ぶこともできず、病人やけが人を病院に運ぶことさえもできない。このような、人権を無惨に踏みにじる行為が許されて良いわけはない。

パレスチナの教会で働くロブ・ウォーラー司祭の黙想も深い。「もし、マリアとヨセフが、今日ベツレヘムへと向かうとすれば、彼らはそもそもベツレヘムの中に入ることができない。軍事封鎖と外出禁止令があるからである。仮に、マリアとヨセフがベツレヘムの入り口に辿りつけたとしても、チェックポイント（検問所）で軍に阻まれ、暴力的に追い帰されることになる。ベツレヘムの宿屋に入ることはいずれにしてもできない。宿屋が一杯だからではなく、旅行者がいないので、閉じてしまっているからである。平和の君がお生まれになった地のクリスマス・イヴは、"silent night"ではあるが、"holy night"ではないのである。」パレスチナにおけるチェックポイントは特に悪名高い。イスラエル軍がパレスチナ人の利用するすべての道路に設けているものである。これによって自治区の強制封鎖が頻繁に行われ、パレスチナ人の生活は徹底的に管理、弾圧されている。

「外出禁止令」と「チェックポイント」。これらはパレスチナの人々を抑圧する恐ろしいシステムである。日本に住む私たちには想像ができないものかも知れない。しかし、考えて見れば、日本社会も、目にははっきりと見えない形で「外出禁止令」が頻繁に出され、「チェックポイント」が張り巡らされているとは言えないだろうか。外国人登録法、入管法、日の丸・君が代の強制、バーコードによる住民管理。例を挙げれば数限りない。最近でも、拉致被害者をめぐる言動には異常なまでの一方的な言論規制状態が起きている。これは遠い国の話ではなく、私たち自身の社会の問題なのである。

この冬のベツレヘムの街には、クリスマスの祝祭はなかった。しかしベツレヘム・フランシスコ会の修道士たちは、こう語った。「確かに、クリスマスの祝祭はキャンセルされてしまった。しかし、クリスマスのスピリチュアルな意味が忘れられることは決してない。たとえイスラエル軍によってでも取り除いてしまうことはできないのだ。」

（にしはら・れんた　中部教区司祭、立教大学教員）





# 外国人学校の制度差別をなくそう

金光敏

2003年が始まり、「今年こそは明るい年に」とすべての人々が考えていると思う。昨年は、「拉致」問題を契機に朝鮮学校の子どもたちへの暴言暴行事件が多発した。私が知る限りでも、朝鮮中級学校の生徒が、通学中に「石を投げつけられる」「大腿部を蹴られる」などの事件があった。朝鮮学校では、度重なるこうした事件について、「過去にも起こってきた」こととし、なるたけ冷静な対応に努めながらも、制服の自制や帰宅時の安全対策など緊張した日々は現在も続いている。

朝鮮学校についてもうひとつ触れる。昨年、京都大学において朝鮮学校卒業生の受験資格を認めようとの動きが明らかになった。朝鮮学校などの外国人学校は、「各種学校」に位置付けられ、学校教育法第一条に適用しないことを理由に、学校卒業資格が認定されていない。だから、朝鮮学校生徒は、日本の国内法規上「無学歴者」としてのハンディキャップを負う。その結果大学受験や就職において、大変な不利益を被り、朝鮮学校などでは、日本政府に対し、こうした不条理を改めるよう運動を行ってきた。

こうした運動は、国際社会においても注目されている。2001年３月に国連人種差別撤廃委員会が日本政府に「朝鮮学校への制約が人種差別にあたる」ことを勧告し、早急な改善を求めた。また同年８月には、国連国際人権規約社会権規約委員会が、同様の是正勧告を出している。

現在、日本国内の約45%の公私立大学が朝鮮学校卒業生の受験資格を認めており、残りの国公私立大学が試験資格を認めていない。すなわち約55%は、文部科学省の判断待ちと言える。

そのような中、京都大学の人権推進機関が朝鮮学校卒業生の受験資格を認める決定を下した。京都大学に在籍をしている朝鮮学校出身者（彼らは大学資格検定試験や定時制や通信制高校に在籍し、卒業資格を手に入れた学生らである）の運動の結果によるものであり、京都大学教授陣の人権の側に立った判断であった。

ところが、この決定が京都大学の総長判断により留保された。理由は「時期尚早」。京都大学の長尾真総長は、朝鮮学校の卒業資格を一貫して認めない文部科学省との兼ね合いを優先し、再度朝鮮学校への差別是正を先送りにしてしまった。

一方、小泉内閣の至上命題になっている「構造改革」論議の中で、外国人学校への規制緩和が議論されている。もはや朝鮮学校などの外国人学校への卒業資格未認定問題は、文部科学省のプライドの問題で、どこで折り合いをつけるのかというのが本当の争点だろうと考える。

ところが、政府が進めている外国人学校への規制緩和に朝鮮学校や韓国学校、中華学校などの定住外国人の民族学校が含まれない可能性があることが少しずつわかってきた。関係者の間では、“そこまでやるか”という感じである。

日本社会は、着実に多民族・多文化化していく。こうした流れを拒否することは、「情報化と国際化」の時代と称される中で、逆に停滞をもたらす可能性がある。私などは、いっそのこと時代の転換期に立ち、新しい社会像を描いてみてはと思う。いろいろな人々が、対等に付き合い、公平で開かれた社会を築く。そうすることは、結局は、日本社会の多様性をもたらし、豊かな文化創造につながる。そんな中で、もし定住暦の長い在日韓国・朝鮮人の民族教育が保障されない前例を残せば、他の外国人住民にも「民族的アイデンティティを認めない」宣言として捉えられても仕方ない。最も共生のしやすい在日韓国・朝鮮人に民族教育の機会を保障することは、まさに時代の試金石であり、共生社会の実現にむけた最初の第一歩なのだと考える。

（きむ・くぁんみん　民族教育促進協議会事務局長代行）

# 広場に波打つ希望

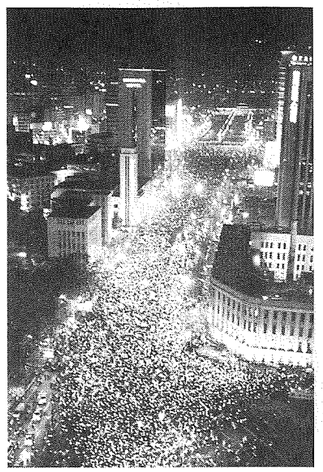
姜 恵 楨

記憶の中にいくつかの広場がある。80年代、独裁が目を光らせていたあの時期は、人々の自由な発言や行動が極端に制限されていた。冷戦下の理念の対立軸によって人々が引き裂かれていた中、権力も金も発言の手段も持たぬ人々は自らの意思表示と互いの疎通のため広場に集った。通っていた大学の図書館前の広場、明洞カトリック教会敷地内の広場、87年6月民主抗争のソウル市庁前広場は、抵抗の空間への記憶として私の中に残っている。

2002年。姿を変えたいくつもの広場を見た。

ワールドカップの熱気が全国に波打った6月、韓国の試合がある日にはソウル、光州、釜山、済州…で喜びの群集が広場を赤く染めた。80年光州民衆抗争を体験した知人は「応援の群衆は単に広い道路にそって歩いているのではない、人々が集まれば次はどこへ移動するべきかを彼らは知っている。光州全南道庁前、ソウル市庁前の広場へと人々を導いたのは、民衆の空間への記憶である」と表現した。だが2002年6月の空間には、闘いや勝利を願う悲壮感ではなく、共に遊ぶことの楽しみを知った人々の喜びが満ちていた。広場は祝祭の空間となった。

11月。在韓米軍の装甲車が女子中学生二人をひき殺した事件（6月13日）をめぐり、米軍事裁判では被告に無罪評決が下され、誰一人責任が問われなかった。幼い少女の6月の死に沈黙していた自らを恥じるように、数日後から広場に市民が集い始めた。切っ掛けとなったのは、一人の個人がインターネット上で行った提案。二人の少女への追悼と不平等なSOFA（韓米行政協定）の改正要求、平和への願いを込めて、毎日6時に光化門の街にろうそくを灯そうという声に、人々が応えたのである。南北分断国家で最もタブー視されてきた米軍の問題に声を上げた「ろうそくデモ」。そこには、少女と同じ年頃の中高生から子連れの若い家族の姿も目立った。数百、数千、数万個に増えた悲しみと怒りのろうそくは、凍りつく寒さの夜の広場に大きく揺れ、人々は感動を共にした。11月末に始まった夕方6時のろうそくデモは今も続いており、1月14日に50日目を迎えた。



12月14日ソウル支庁前
10万人平和ろうそく行進
写真：統一ニュース

12月19日の大統領選挙。所属政党の派閥や金脈・学閥とは無縁の盧武鉉氏が当選した。盧氏にとっては、名もない個人の支持者たちが使いこなしたインターネットが、強い武器となった。変革を願う支持者が自発的に発信する情報を通して、多くの市民は対抗有力候補が流すネガティブキャンペーンの虚を見抜き、正論を名乗る保守メディアが伝えない情報を自由自在に流通させた。インターネットがなかったら盧武鉉氏の当選は実現しなかったと言っても過言ではない。パソコンモニターを覗く個人は、ネット空間で横につながることで双方向の意思疎通を図った。80年代の広場での発言は限られた人にしか届けることができなかったが、ネット上の広場から発信した声はどこまでも広がっていった。

2002年の広場で共に種蒔いた希望の実現を夢見ながら、韓国の人々はいま、各々の場での一歩を再び踏み出しているように思う。広場に集えば何かが起きることを身体で知った人が、何かを起こすために広場を創る。その胸躍るようなときめきの体験を、閉塞した状況に何とか風穴を開けたいと日々奮闘する、日本の友人とも共に分かち合いたい。

（かん・へじょん　日本の教科書を正す運動本部［アジアの平和と歴史教育連帯］国際協力委員長）

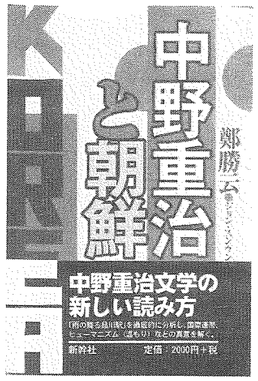




# 本から「在日コリアン」を考える ⑫

高 二 三

## 中野重治と朝鮮




鄭勝云・著
定価2000円+税
新幹社

昨年、まだ暑さが残る頃、大阪から電話があった。梁永厚（ヤン・ヨンフ）先生からだった。共通の知人のことで、私から電話をかけることはあっても、梁先生から電話があることはめったにない。どうしたのだろう。用件は、今回紹介しようと思う鄭勝云（ジョン・スンウン）氏の本を出版してほしいということだった。

直接の教え子ではないようだが、関西大学に鄭勝云さんが留学中、とても親密な間柄であったらしい。鄭さんの帰国後、韓国での就職の関係上、急ぐ出版であった。新幹社には他にも急いで出版せねばならぬ本があって返事を躊躇した。だが、ほかならぬ梁永厚先生からの依頼なので、安易に断ることはできなかった。中身を読んでから出版するかどうかを決めることにした。

私が三千里社に勤めていた頃、編集委員と編集部、それに若干のゲストを招いての慰安旅行が年１回もたれていた。梁先生は、その時、何度かご一緒したことがあった。ある時、朝鮮学校の校長を辞め、金日成主義（朝鮮総連）と対決するのだ、と決意を語られていた。強く印象に残った。とても優しく誠実な文章を書き、そして生きている梁先生の中に、このような「激しさ」があることに驚き、一目おかざるえない存在となった。

原稿を持って、梁先生が大阪から新幹社を訪れて下さったのは、それから１週間後だった。

本書の中身は、私にとっては因縁深いものであった。

本書の論点はいくつかあるが、その一つが「雨の降る品川駅」をめぐってである。従来、「雨の降る品川駅」は伏せ字が多くて、とりわけ詩の後半部分は意味を読みとることすらできないできた。それを、原詩が発表直後、朝鮮語訳されたものを発見し、日本語に復原したのが、水野直樹（現京大人文研教授）氏であった。本書は、その水野氏の作業を補完するかたちで、「テロリズム」と「ヒューマニズム」を論じ、中野重治の根本思想に近づこうとしている。

「因縁ぶかい」と言ったのは、水野直樹氏が「『雨の降る品川駅』の事実しらべ」という文章を寄せた『季刊三千里』（第21号）には梁永厚先生も「柳田国男と朝鮮民俗学」を寄せていて、共に印象深い論文だったからである。

小さな出版社の利点の一つは、顔の見える著者の本を出せるということである。しかし、今回ばかりは急に出版することになったので、鄭勝云さんには会えないまま本を作ることになるのだろうかと思っていた。ところが、本ができた時、鄭さんは本の到着を待ちきれずに、韓国の光州から本を受け取りに来たのだ。夜の10時に上野で会って、翌日昼の２時には別れるという一瞬の邂逅であった。

36歳の鄭勝云さんは熱血漢で素朴人、そして親孝行な人であった。まだまだ自身が未熟なこと、これから研究したいこと、いっぱい酒を飲んで、そして語り合った。鄭さんは数年関西で暮らしていた。どのような日本人、在日コリアンと出会ってきたのだろう。中野重治は日本人の中では世界的に知られたプロレタリア作家である。しかも「朝鮮」をとりあげた作家である。とはいえ、韓国で生まれ育った人が中野重治を研究する時代になったのである。若い研究者にエールを送りたい。

（こ・いーさむ　新幹社代表）

『中野重治と朝鮮』は
聖公会生野センターで取り扱っています。
TEL 06-6754-4356　FAX 06-6754-4357
e-mail : ikuno@nskk.org

# 「日朝」「在日」、そして私たち

佐藤 信行

昨年９月17日の日朝首脳会談以降、洪水のような「北朝鮮バッシング」の中で、在日コリアン、とりわけ朝鮮学校に通う子どもたちに対する暴行・暴言事件が相次いでいる。繰り返される脅迫電話やホームページへの書き込みなどを含めると、２カ月間だけで500件以上になるという。

昨年10月７日、私たちは東京で「在日の子どもたちへの迫害を許さない！緊急集会」を開いた。準備期間はわずか１週間であり、もっぱらＦＡＸとＥメールで友人たちに発言と参加を呼びかけただけだが、100人近くの日本人と在日コリアンが集まってくれた（当日の発言や、集会に寄せられたメッセージは、『ＲＡＩＫ通信』第75号に掲載した）。

いまマスコミでは、「日本人拉致問題」について核心部分が伏せられたまま、どうでもよい細部が克明に報じられる一方、日本の歴史責任と東アジアの平和構築という本来の課題が、遠景に追いやられている。しかも、現に進行している在日への迫害については取り上げようともしない。日本社会が直視しなければならない問題を日本人が呼びかけて提起したということでは、この集会は成功だったと言えるかもしれない。

しかし、何よりも私の気持ちを重くさせたのは、私を含めた日本人の発言と、在日の友人たちの発言との「位相」の明らかな違いであった。「北とも南とも、また日本ともこぼれ落ちた存在」と語る在日の、その怒りと悲しみは、私の想像を絶する。私はこの20数年間、在日の友人たちと民族差別撤廃闘争を共に担ってきた、と自負してきた。しかし、私たちがいま直面している、とてつもなく高い壁を前にしては、私の言葉はあまりにも空虚であり、私のちっぽけな自負心も粉々に砕け散ってしまった……。

そのような居たたまれない重い気分に陥っていた時、柏木義円の言葉が蘇ってきた。

「予は朝鮮を観たいと思ふて来た。而して朝鮮の山水を見た……都会を見た。併し予は未だ朝鮮を見たとは云へない。否な朝鮮の真相を見る眼を持たない。畢竟、朝鮮を見ることが出来なかつた」

1925年４月、日本の植民地統治下にある朝鮮を訪れた安中教会の牧師・柏木義円は、自ら主宰する『上毛教界月報』にこう記した。彼は1910年の韓国併合をはじめ、日本組合教会の朝鮮人伝道、1923年の関東大震災時の朝鮮人虐殺に対して、批判してやまなかった。その彼が初めて朝鮮を訪れ、「朝鮮の真相を見る眼を持たない」と呟くしかなかったのである。そして彼はこのあと『月報』の巻頭に、「われらは……独一の真神を天の父、人類を同父の同胞兄弟なりと信ず」「われらは無戦世界の実現を望み、軍国主義の廃滅を期す」と掲げるようになり、1938年、天に召されるまで、その主張を貫いた。

私は柏木のこの言葉に励まされて、日本の「植民地主義」に立ち向かっていきたい、といま願っている。なぜならそれは、1945年の日本敗戦と共に消滅したわけでも、戦後半世紀にわたる日本国家および日本社会においてもいまだ克服されていないことを、私たちはいま突きつけられているからである。「植民地主義」とは、剥き出しの暴力であり、その暴力を覆い隠すイデオロギーである。私たちキリスト者は、柏木がそうであったように、その暴力も、そのイデオロギーも根底から批判する視座と確信とをすでに与えられている、と信じたい。

（さとう・のぶゆき 在日大韓基督教会在日韓国人問題研究所）





# ザイニチの分裂から

丁 章

列島と半島
ザイニチの分裂
日本と朝鮮の
分裂状態

北と南
ザイニチの分裂
共和国と韓国の
分断状態

ぶんれつぶんだんぶんれつぶんだん
断裂　裂断　断絶　絶望

列島か半島かと
引き裂かれる
その絶望の脳みそは
頭蓋骨の笑み割れにより
生まれ出ずる
新たなる希望

北か南かと
断ち切られる
その絶望の受精卵は
見慣れぬ執刀医たちの
これまでにない切開手腕により
血まみれた胞から救い出される
新たなる希望

どちらかなのではなく
どちらかなのかのその問いから
脱け出したところの何かへ

どちらかだけでは足りない
どちらもだけでもまだ足りない
その次のところの何かへ

丁　章　（ちょん・ぢゃん）
1968年、京都市にて出生
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業
現在、大阪府東大阪市在住

著書
詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）
詩集『マウムソリ　－心の声－』（新幹社）

# ゆっくり描きながら

山根博子

聖公会生野センターの絵画教室に、通い始めて10年になります。

始めは娘の由香にも何かできることがないかなぁと考えていた頃に、障害児にも絵を教えてくれるこの教室の事を知りました。

絵画教室に通い出した頃は、同じ画材でしたが、油絵を描いたり、パステルを使ったり、マーカーを使ったり、いろいろ組み合わせたりしていくうちに絵の広がりが見られる様になりました。

由香の絵は、とてもとてもていねいにゆっくりと、ひと筆ひと筆と描いていきます。その緻密さゆえに、一枚の絵を仕上げるのに、とても時間がかかります。色彩豊かな作品ばかりです。

昨年は３回の個展と絵画教室のクリンもだん絵画展、計４回開催しました。

親である私も、個展を開くことなど、初めての経験。何もわからず、絵画教室の先生や、ボランティアで教室を手伝ってくれている人達に、全部おまかせの状態でしたが、回を重ねるごとに、たいへんさ以上の面白さが、わかってきました。

一生懸命描いた後の達成感。遠くから時間をかけてお金をかけて見に来てくださった人たちの声。

山根由香個展
2002.11.25-12.8
ストリートギャラリー(神戸・住吉)

何年も会っていなかった人や、小さい時にお世話になった人からは「なつかしさと同時に、元気を・・・」「強力な底力にパワーを・・・」「由香さんに負けないようがんばろう」など、とてもうれしい感想が。

知らない人たちからも色々声をかけられたり、メッセージを書いてくれたりと、由香の心の中も笑顔になったはずです。

私も大変だったけれど、個展を開催してよかったと、周囲の人たちに感謝でいっぱいです。障害を持って生まれてから、たくさんの人たちに助けられ、支えられてきた25年。とても家族だけでは支えきれなかったと思います。ダウン症の訓練所、保育園、小学校、中学校、養護学校、作業所、そしてグループホームに入居。ほんとうにたくさんの人たちに助けられてきました。

こういう人たちに、由香のがんばっている姿をみてほしい。感謝を込めて。

また、絵を描くようになって、知り合った人がたくさんできました。由香の事を知ってくれる人が確実に増えました。由香が生きていく上で、このうえなくうれしい事です。

絵を描く時間はたっぷりあります。今も暇さえあれば、ペンを持って描いています。あいかわらず描くスピードは超スローモーションだけれど、これは由香の持ち味。一生描き続けていくだろうなぁ。描きつづけていってほしいなあと思います。

これからも、年1,2回の個展、グループ展を開催して、由香のがんばっている姿を見てもらいたいし、また、１人でも多くの人との出会いも楽しみです。

(やまね・ひろこ　絵画教室受講生山根由香さんの母)





# ほんものの「芸」は、やっぱり心にジンジン響く

牧口一二

あの大阪女学院ヘールチャペルでの催しから、もう５年ですかぁ。昨年の夏ごろ、聖公会生野センター10周年記念企画に向けての実行委員会のお誘いが届いて、そう思った。

それほど５周年のときの記憶が鮮烈だった。永六輔さん、いまは亡きマルセ太郎さん、ジャズ奏者の金成亀（キム・ソング）さん、そしてお馴染みの趙博（チョウ・パク）さんたちが（会場に漂う雰囲気がよかったのか）ノリにノッて、それぞれの「芸」を精一杯に演じてくださったのだ。

きっと、あのときの感激と興奮がボクの胸の中で燃え続けていて、とても５年が経ったなんて思えなかったんだと思う。

◆

今回も生野センターとともに、自然災害で被災した障害者を支援する「ゆめ・風基金」との共催という形になった。阪神大震災から８年。聖公会生野センター５周年のときは震災後３年で、「ゆめ・風基金」は発足して２年半が経過したところだった。

「ゆめ・風基金」を知らない人もおられるだろうから少し説明すると、あの大震災直後、やはり障害者は「後回し」になってしまったのだった。つまり、世の中全体が大騒ぎになると、障害者に対して「いまはそれどころではない」という言葉が簡単に発せられてしまうのだ。避難所に充てられた公共施設や学校は、とても障害者が暮らせる環境ではなかった。車いす使用者には使えなかったし、視覚や聴覚に障害がある者には情報が届かず、知的や精神的な障害者は混乱の中で落ち着けずに、遠く離れた親戚や施設行きを強いられた。

ふだんは何とか地域の人々と「共に生きる」を模索していた障害者たちも、緊急事態には極めて弱いことを痛感させられたわけである。その教訓から大災害の直後すぐに障害者用の設備が整ったプレハブが10数戸ほど建てられる支援金を普段から積み立てておこう、それが「ゆめ・風基金」運動の発足だった。その呼びかけ人代表を引き受けてくださったのが永六輔さん。この間、永さんの活躍ぶりは筆舌に尽くし難く、本気で支援してくださり、事務局を預かる私どもはどれだけ励まされていることだろう。

７年半が経過した現在、「ゆめ・風基金」は、おかげさまで２億円を突破した。１万人以上の人々が毎月、毎年こつこつと支援金を届けて続けてくださっている。また、10か年計画はあと２年半だが、継続を望む声が大きく、第２次10か年として続けることにした。どうぞ、これからもご支援をお願いいたします。

◆

さて今回の聖公会生野センター10周年には、その永さんが来てくださる。また、同じく呼びかけ人として支援してくださっている筑紫哲也さんも駆けつけてくださる。加えて、辛淑玉さん、桂あやめさんが出演してくださることになった。そして、いつもの強力な「ゆめ・風」の助っ人、趙博さんと豪華な５人囃子がそろったしだい。

さぁ、今度はどんな「芸」が飛び出すことやら、とてもたのしみだ。ほんものの芸を心ゆくまで味わっていただきますように。それとともに「聖公会生野センター」と「ゆめ・風基金」のこれからをしっかり見届けていただきますように。

（まきぐち・いちじ　ＮＰＯ法人ゆめ・風基金
代表理事・大阪聖ヨハネ教会信徒）

## お知らせ

### 聖公会生野センター10周年記念イベント

あっちもこっちもみんないきいき

# 東西５人囃子

出演：筑紫哲也,辛淑玉.桂あやめ.趙博.永六輔
日時：2003年3月16日(日) 午後2時30分～5時(開場2時)
会場：大阪女学院　ヘールチャペル
　　(JR環状線「玉造」下車、徒歩10分/
　　地下鉄長堀鶴見緑地線「玉造」下車、徒歩5分)
入場料：¥3,000(当日)、¥2,500(前売)

プログラム：第１部　一本のえんぴつがあれば・・・
　　５人それぞれ名調子
　　第２部　今の日本に「ひ・と・こ・と」
　　５人それぞれメッセージ

主催：聖公会生野センター開設10周年記念事業実行委員会
　　被災障害者支援NPO法人「ゆめ・風・10億円基金」

申し込み・お問合せ＝聖公会生野センター
　　チケットぴあでも取り扱っています。0570-02-9999　ナビダイヤル（一部携帯電話・PHSからはご利用できません）06-6363-9966　(Pコード491-396) ファミリーマート・セブン-イレブン・サンクスでも購入できます。

前売券のお求めはお早めに・・・

### 読者の声

◆かつての強制連行に置き換えて（拉致の）ニュースを読んでいます。日本政府の対応の遅さ、厚顔無恥は、他の国の人・自国民を問わず怒りを覚えます。それにしてもマスコミの加熱は何なのかと真意を測りかねています。（今まで放置していて、急に騒ぎ出しています）◆いつも楽しみに読んでおります。最近思うのは、いま いちばん美しい日本語（の文章）を書いておられるのは在日の方々ではないかということです。日本人が押しつけた言語でありながらそれを超えてしまった感があるのです。そんなわけで丁章さんのファンです。（詩集もってます）

### 余韻

10周年記念事業のしめくくり、東西五人囃子（あっちもこっちもみんないきいき）に向けて、毎日準備を進めています。この記念事業で改めてたくさんの方々と一緒にセンター活動をしているということを実感しています。3月16日はきっと楽しいイベントになります。ぜひお越しください。（す）

### 聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費
年額　1口 3,000円（個人）　1口 10,000円（団体）
・郵便振込00960-0-133429「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 ＵＦＪ銀行 東大阪支店
　普通預金　3711311「聖公会生野センター」


発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail:ikuno@nskk.org
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：木　村　幸　夫
編集人：大　橋　　襄


ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。